

学習発表指導における心理学的アプローチの効果（1）

—ミュージカル：「くるみ割人形」を題材にして—

○金子典子（豊田市立中山小学校）

金子幾之輔（愛知みずほ短期大学）

キーワード：学習発表指導、発表の意義、カイ二乗検定

目 的

児童の学習発表指導において最も大切なことは、教師が児童の学習意欲を向上させ、発表することの意義を理解させることにありと考える。そして、音楽等の教科指導において、自己表現できる機会を可能な限り設けることである。実際、A小学校では毎年、教科学習の成果を11月に発表する学習発表会を学年単位で実施している。このような行事は、児童ひとりひとりのアイディアと能力を発揮させ、「コミュニケーション・スキル」、「結束力」及び「自己効力感」を高めていると思われる。なぜならば、このような行事が教師や児童及び保護者から支持・賞賛されているからである。確かに当該行事は経験知として成果を上げているようであるが、その実証性については明らかになっていない。そこで、本研究ではミュージカルの「くるみ割人形」を題材とした学習発表指導において、一連の心理学的アプローチを試み、毎回、児童に対して質問紙を実施することによってその効果を検証する。

方 法

研究倫理 調査開始前に倫理的配慮をする旨を説明し、調査対象者及び関係者からの了解を得た。

調査対象者 A小学校6年生 107名

調査時期 2019年10月～2020年2月

調査手続き 小学校の音楽室で以下のような学習発表指導前（第1回）、指導中（第2回～第3回）、指導後（第4回～第7回）において、無記名による自由記述式の質問紙調査を行った。調査項目は、第1回「題材に対する見解」、第2回「学習発表練習時の見解」、第3回「当該児童の学習発表練習の様子を撮影したVTR観覧後の見解」、第4回「学習発表会直後の見解」、第5回「学習発表会に対する保護者等の評価」、第6回「当該児童の学習発表会における様子を撮影したVTR観覧後の見解」、第7回「学習発表会3か月後の見解」であった。

分析方法 7回に亘る質問項目で記述された内容について、研究者2名で協議しながら回ごとに肯定的見解と否定的見解の2要因に分類し、7回の回答結果とクロス集計した。そして、(2×7)表の χ^2 検定を行った。

結 果

指導内容別に肯定的見解と否定的見解の項目数をクロス集計し、 χ^2 検定した結果、項目数の偏りは有意であった($\chi^2(6)=384.68, p<.01$)。次に、残差分析を行った結果、Table 1にみられるように、第4回目以降から学習発表に対する肯定的見解が優位になっていることが分かった。

考 察

第1回 学習発表会の題材についての質問に対する児童の回答は、学校行事等の中で歌うミュージカルの体験がなかったことから、「難しそうで出来ない」といった否定的見解が大半を占めた($p<.01$)。

第2回 第1回目と同じく学習発表会でミュージカルを歌うことに対して児童の回答は否定的見解が有意に多かった($p<.01$)。これは、ミュージカルがどのようなものであるかをイメージ出来ていない児童が多かったことによるものといえよう。

第3回 当該児童が自分達のミュージカルの練習場面を撮影したVTRを視聴した直後における質問紙調査の回答を分析すると、まだミュージカルに対する否定的見解が肯定的見解を上回っていた($p<.01$)。このことは、当該児童が自分達の演技を客観視し、「声が小さい」等の欠点に対する気づきの結果を反映したものといえよう（セルフモニタリング）。その後、児童達は欠点を改善するために放課時間や家庭において、友人と協力し合いながら意欲的に学習発表会の練習を繰り返すようになり、学習発表会では、好結果が得られた（修正フィードバックの効果）。

第4回 前述のように学習発表会で好結果が得られたこともあってその直後の質問紙への回答結果は、第3回目の結果とは逆に肯定的見解が否定的見解を有意に上回った($p<.01$)。この結果は、実際に、「練習すれば出来る」といった自己効力感等の肯定的見解が多く示されたことから頷ける。

第5回 学習発表会に対する保護者等の評価の報告においても「良かった」、「頑張ったね」等の称賛を付与された方が多い傾向にあった($p<.05, p<.10$)。

第6回 前述の学習発表会で児童自身が演技した様子を撮影したVTRを見ての当該児童の質問紙に対する回答結果は、第4・5回目と同様に肯定的見解が否定的見解よりも有意に多かった($p<.01$)。このことは、学習発表会の練習過程において培われた「コミュニケーション・スキル」と「結束力」、そして「自分達も出来る」といったことを確信した結果によるものといえよう。

第7回 学習発表会3か月後の質問紙に対する児童の回答結果も、学習発表会に対する肯定的見解が否定的見解よりも有意に多く($p<.01$)、学習発表会に対する肯定的見解が相変わらず持続されていることが分かった（フォローアップ）。そして、学習発表会で得られた成果によって、「他の学習場面でも頑張りたい」といった見解(一般化)を示す児童もみられた。

結 論

本研究ではA小学校6年生の児童107名を対象にして、7回からなる学習発表指導に一連の心理学的アプローチを導入し、毎回、児童に対し自由記述式の質問紙を実施することによって、その効果検証を試みた。具体的には、指導内容別に児童の肯定的見解と否定的見解の項目数をクロス集計し χ^2 検定を適用した結果、第4回目以降からの学習発表会に対する肯定的見解の優位性が検証された。

今後は、本研究のような量的検証のみならず、質的内容の検証も具体的にを行う必要がある。

Table 1 調整された残差

学習発表指導内容	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
肯定的見解数	-14.34**	-7.05**	-7.25**	2.88**	1.39 [†]	10.29**	5.82**
否定的見解数	14.34**	7.05**	7.25**	-2.88**	-1.39 [†]	-10.29**	-5.82**

(注) [†] $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$